



Open Heartを 胸に刻んで

富士山の麓のボーディングスクール

朝、アンジェラスの鐘と共に1日の始まりを沈黙の礼拝で迎える不二聖心。
1801年、フランスのアミアンで最初のボーディングスクール（寄宿学校）
を開いた聖心会。
その伝統を受け継ぎ、多彩な行事と奉仕活動等を通して、多様性の中の
一致を実現した全人教育を行っている。



不二聖心女子学院中学校・高等学校

ような関係性を築けたことは何物にも替え難いものとなっている。「24時間一緒にいるのでよく話をします。くだらない話もしますし、進路の話もみんなでしたり、寄宿舎に入ってよかったです」近藤さんは姉妹校のスコットランドのKilgarron Schoolに留学予定で、そこでも不二聖心での経験を活かし寮生活を行う。
英語教育においては生活の中で使えることを目標に、デイベトやスピーチコンテスト、文化祭でのポスターセッションなど実践的な指導を行う。ここで活躍するのが帰国生ばかりではないところが不二聖心の魅力だ。「周りの子も授業中に積極的に質問するのですごいです。みんな個性的で国際的な雰囲気です（久富さん）。また試験前などによく英語の相談をされる一方で、漢字などの苦手分野ではしっかりとサポートをしてくれる。こうした互いの背景や能力を尊重したコミュニケーションが相乗効果を生み、失敗を恐れずチャレンジする雰囲気生まれている。また英検・TOEICなどの資格取得、海外進学ガイダンス、帰国生にはMLAに準拠した卒業論文製作を推奨するなど、一人ひとりの将来に合わせた細やかな指導を行う。
「帰国生が居心地のいい空間を作ること一番大切にしています。聖心のスピリットであるオープンハートとはどういうことか、いつも生徒たちに伝えており、文化的背景が異なる子たちが来てても非常にいい形で受け入れてくれます」（鈴木教諭）。そしてこう付け加える。「中高時代の友達は一生もの。かけがえのない時間を一緒に過ごしてもらいたいです」

正面から長い坂道をのぼり、茶畑に沿って道なりに歩いていくと、右手にヨーロッパの学校と見まがう赤い屋根の校舎があらわれる。奥にそびえるは白と青に染まる富士山——日本でも有数の自然環境に恵まれた不二聖心。その帰国生の受け入れには出色のものがある。「ここ

は自然に囲まれ、キャンパスが海外の雰囲気に近いので、そういう経験値を持っているお子さんにとってはアジャストしやすいのかなと思います」（英語科主任・国際交流担当・鈴木幸子教諭）
自然の中で伸び伸びと過ごす生徒たちの心は素直でおおらかだ。共にアメリカに在住していた池田すみれさん（高1）、久富穂佳さん（高1）は、同級生たちから現地の話をよく尋ねられると声をそろえる。「転入初日、教室からすごい歓声が聞こえて、ドアに入れないくらい集まってきたんです。そこから質問が始まって、一度に何回も聞かれるので誰が質問したのかもわからないくらい（笑）」（池田さん）。また「みんな優しい」という意見も同じ。同じ帰国生として入学された高3の方と文通し、相談に乗っていただいていた（久富さん）。日本に帰国した当初、交通手段の違いに戸惑っていたところを、友人や上級生と一緒に帰ったりと手助けしてくれたこともあるという。また新入生にそれぞれ高3がつき学校生活のサポートをする「エンジェル制度」など、家庭的な雰囲気を大切にした体制が整っている。

そして寄宿舎。伝統的に学年の壁を取り払い、食事から就寝まで上下のつながりを意識した共同生活を行う。中東のインターナショナルスクールを経験した近藤千陽さん（高2）はその日々を「大変です（笑）。ルールがいっぱいあって、上級生や下級生の接し方もいろいろと厳しいので」と語る。その一方で帰国当初は発想になかったマナーや敬語などを身に付けられた経験や、共に過ごす中で家族の

